子育ての「主体」としての母親を支援する

―幼稚園における子育て支援の役割―

高畑　芳美
（神戸市立名谷あおぞら幼稚園通級指導教室）

＜問題と目的＞

平成 17 年 1 月「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について」という中央教育審議会の答申以降、幼稚園における子育て支援活動も盛んに実施されるようになった。幼稚園は、地域の幼児期の教育のセンター的役割を果たすことが求められている。幼稚園における子育て支援活動についての名須川・楠本らの調査（2011・2012）によると、未就園親子への園庭開放や子育て相談等の形で実施されている。

本研究では、アンケート調査では見えにくい子育て支援を利用する保護者のニーズをインタビュー調査し、幼稚園における子育て相談の果たす役割について報告する。

＜調査方法と結果＞

子育て相談員として幼稚園の子育て支援事業に携わっている筆者が、公立幼稚園の地域開放に参加している未就園児保護者と在園児保護者のうち調査協力の了解を得られた 13 名の母親を対象にインタビュー調査を実施した。収集したインタビューデータを、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下 M-GTA と表記）という方法を用いて分析した。対象者の平均年齢は、36.6 歳、専業主婦である。インタビュー平均時間 29.4 分（最長 45 分～最短 20 分）。逐語録した個人記録から、「子育て相談」に関わる 17 の概念と 9 のカテゴリーを生成した。カテゴリー間の関係を示す結果図は図 1 の通りである。

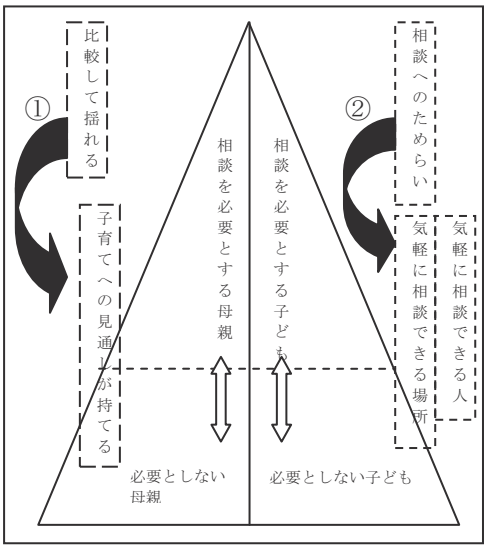

図１．結果図（９つのカテゴリー間の関係）

＜考察＞

幼稚園における「子育て相談」として、結果図にあげた黒い矢印の部分が重要な鍵となることがわかった。

①の鍵では、「比較して揺れる」母親の気持を受け止め子どもを否定的に捉えがちである。その視点を変え、子どもを肯定的に受け止められるようにするためには、心理臨床的なアドバイスができる保育カウンセラーとしての資質が不可欠である。

②の鍵では、従来の相談窓口を作って相談者の来室を待つという姿勢では、「相談へのためらい」が大きい。そこで、親子の遊びに寄り添いつつ気軽に話しやすい雰囲気をもつ「横並びの敷居の低い子育て相談」が、幼稚園という一般的な場に望ましい子育て相談の姿であることがわかった。

岡田・白川（2002）は、幼稚園における「子育て支援」はピラミッドの底辺、基盤となるレベルの育児支援であるという。そうであるならば、幼稚園はその底辺を広げるような視点をもつことがより多くの親子の支援を可能にし、母親自身の主体的な子育てを支援することになると思われる。

そして、今回の母親の意識調査で新たに分かったこととして、子育て相談者は、母親や子どもの相談相手となるだけでなく、担任や園内の子育て支援に関わる担当者間の見守りとアドバイスを行う「つなぎ手」としての役割を担う存在として意識されていたことである。このことは、最近幼稚園に導入されつつある「特別支援教育コーディネーター」としての仕事であり、外部に委託する子育て相談との違いを明確にするものであるといえる。

＜引用文献＞

名須川知子・楠本洋子（2011・2012）兵庫教育大学研究紀要．第 39 巻.第 65 回日本保育学会発表要旨
白川蓉子・岡田（高岸）由香（2002）幼稚園における乳幼児の子育て支援の役割-「子育て相談・仲間づくり」の実践事例から-．人間科学研究 Vol.9No2.